

【第3分科会】子育てと自立支援

発表校：千葉県立長生特別支援学校

指導助言者：橋本 陽介 氏

【概要】

子供の将来の自立に向けて、どのような支援を行っているか、発表校の小中高での取り組みが提示され、必要な支援について議論しました。

参加者：主幹教諭 高橋 幹基



千葉県立長生特別支援学校のPTA活動、保護者アンケート、各学部のキャリア教育の実践を通して、子供の将来を見据えた自立支援の在り方について学びました。

PTA活動では、「できる人が、できるときに、できることを」を基本に、文化祭支援、校内美化、広報活動、研修会等が行われていました。

研修会では、グループホーム利用や障害基礎年金など、保護者の将来不安に即した内容が扱われていました。

保護者アンケートからは、就労、生活、健康管理、親亡き後の暮らし、コミュニケーション等への不安が示されました。

学校には、職業体験、進路相談、生活習慣、金銭管理、ルールやマナーなど、将来を見据えた継続的な支援が求められていました。

各学部の実践では、小学部で自己選択・基本的生活習慣、中学部で高等部生活を見通した活動や事業所見学、高等部で本人の思いを起点とした地域連携によるキャリア支援が行われていました。

自立支援は高等部段階だけでなく、小学部からの日々の生活や学習の積み重ねによって育まれることを再認識しました。

自己選択、役割遂行、他者との関わりなどの経験を、発達段階に応じて意図的に設定することが重要です。

また、保護者の不安に対して、学校が外部機関と連携して具体的な情報を提供することは、家庭の見通しと安心感につながります。

必要な情報を早い段階から共有する仕組みづくりの大切さを学びました。

【グループディスカッション】

テーマ：保護者が見通しを持てるような、各学部の取り組みや学校独自の特色ある取り組みについて

構成員：都内特別支援学校PTA5名 他県特別支援学校PTA(栃木県、新潟県各1名)教職員1名 全8名

所属校の実践事例の紹介をしました。小学部在籍中から、高等部卒業後の進路先や成人後の福祉サービスについて情報を知る機会の設定が重要であることを共有しました。各校の取組が活性化するようPTAや学校が学習会や見学会等の企画を継続実施したいと考えます。

【助言者より】

合理的配慮について、配慮を求める側の主体性が重要であることと同時に、当事者のモラルやリテラシーが求められる点について、学びました。

【感想】

本研修を通して、子供たちの「今」の学びを「将来の暮らし」につなげる視点の重要性を学びました。

本人の思いや願いを中心に据え、学校・家庭・地域が連携しながら支援を継続することが、自立と社会参加の基盤になると感じました。





分科会「子育てと自立支援」に参加し、子供の将来の自立や高等部卒業後の暮らしを見据えて、今家庭や学校で何に取り組むべきかを考えさせられる、大変貴重な機会となりました。

アンケート結果や発表でも示されていた通り、親としては親亡き後の居場所や就労、日常生活スキルなど、将来に対する不安が尽きません。

しかし、今回の分科会を通して特に心に響いたのは、周囲が手厚い支援を準備するだけではなく、「本人が手伝ってほしい事を主体的に伝える」という姿勢の重要性です。

ただ支援を待つのではなく、自分に必要な配慮や助けを自ら発信していく力を育てることが、自立への大きな一歩になると実感しました。

また、支援を求めていく上では「モラル・リテラシー」を持ち、過度な負担を求めるのではなく双方にとって良い関係を築く視点も欠かせないと感じました。

さらに、大学等における合理的配慮の考え方として「教育の本質(シラバス)を変えない」という前提があることや、「できることを考える」という視点にも深く気づかされました。

つい「やりたいこと」や「できないこと」に目が向きがちですが、シラバスを理解した上で、本人自身が主体性を持って「今自分にできること」に向き合い、積み上げていくことこそが本質的な自立につながるのだと学びました。

電車に乗る・買い物をするなどの身近な社会経験を重ねつつ、小・中・高での学びをしっかりと将来へ繋げていきたいと思います。

家庭内だけで抱え込まず、子供自身が「自分らしく」主体的に社会と関わっていけるよう、今回の学びを今後の関わり方に活かしていきたいです。

参加者：日下 彩月



子供の年齢によって悩みの種類も変化し、誰しも障害児の子育てというとても壁にぶち当たりながらも乗り越え、今があるのではないでしょうか。

学童期や思春期は学校や周囲の関わってくださっている方々と協力、相談しながら、周囲と比較せず目の前にいる子供を見つめ少しずつ自立を進めたいところです。

子供達一人一人が主体性を持ち出来ることに向き合いながら、自分が何が必要でどうしてほしいかを発信する力をつけることが大切だと学びました。

改めて考える機会をいただきありがとうございました。

参加者：M・R



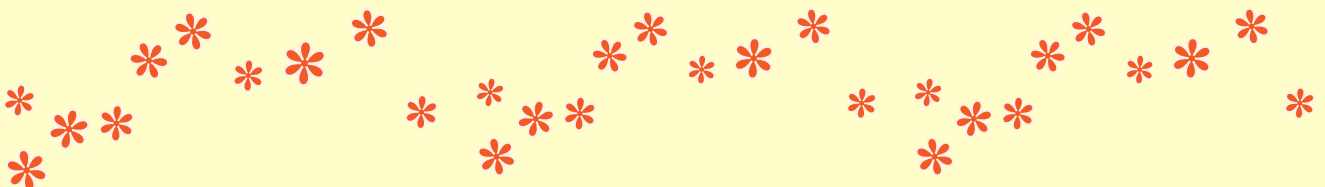
グループワークで、自立に向けて、他校のPTA活動を伺いました。

特に「役所の担当者を学校に招き、卒業後の手続きに関する説明会を開催している」という事例は、良い発想だと思いました。

私は最近、卒業が徐々に近づいていることに焦りを感じ始めています。子どもにマッチした居場所が探せるか、あるのか、心配だからです。

小平のママ友と、施設のリアルな情報収集を始めようと思います。

大会に参加させていただき、ありがとうございました。



【記念講演】

分科会以外にも様々なイベントのあった「東京大会」。

記念講演では、東京大学先端科学研究センター、
当事者研究分野教授：熊谷晋一郎氏が登壇されました。

参加者：会長 駒井 夏美



本大会で最も心に残ったのが、記念講演です。

娘が生後10か月の頃、主治医からリハビリを勧められました。

しかし私の中には、「リハビリは何のためなのだろう。娘は何を望むのだろう。」という疑問がありました。

その答えを探す中で出会ったのが、熊谷晋一郎先生の著書『リハビリの夜』でした。

この本は、「親が娘のことを決めつけてはいけない」ということを教えてくれ、
娘の心を真ん中に置いた子育てをしないと
いう私の原点になりました。

そして今回、その著者である熊谷先生のお話を
直接伺う機会に恵まれました。

副主幹校をお引き受けした時には講師が熊谷先生だとは知らず、
思いがけないご縁に感謝しています。

講演では、「自分にとっての普通」と「娘にとっての普通」は違うという、当たり前でありながら
忘れがちなことを改めて深く考えさせられました。



また、当事者の経験は言葉になりにくく、理解されにくいという「解釈的不正義」のお話は、特に印象深く心に残っています。

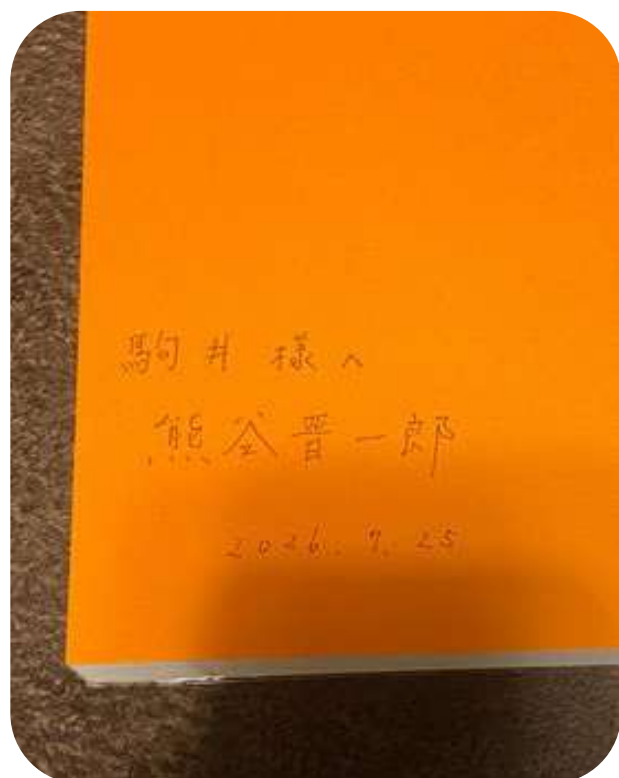
私はこれまで制度や環境といった社会の仕組みに目を向けることが多くありました。しかし、その一方で、当事者の経験そのものを置いて考えてしまう危うさや、自分の思い込みに改めて気づかされました。

社会をより良くしていくためには、まず自分とは異なる誰かの立場や経験を想像することが欠かせないのだと思います。

人と人との柔軟な姿勢で向き合うこと。そうした積み重ねの先に、誰もが安心して暮らせる、より成熟した社会が開かれていくのだと感じました。

「自立とは依存先を増やすこと」という言葉にも深く共感しました。学校で積み重ねる日々の学びも、子どもたちが安心して社会とつながるための大切な一歩なのだと思います。

これからも娘の心を真ん中に置き、一人の人として尊重しながら向き合うとともに、PTA活動を通して、子どもたちが安心して学び、地域とのつながりを育める環境づくりに努めていきたいと思っています。



そのほか、大会の様子



ピアノリサイタル

昼食前にはピアノリサイタルが開催。

難病で重症心身障がい児の弟の影響から医師を目指し、2025年3月に2人揃って医学部現役合格。

現役医大生ピアニスト・兄-ズが出演。

美しいピアノメロディーにうっとり。

企業展示コーナー



実際に車いすに座り、大人が立って歩くのと同じ目線を体感出来てびっくり！

さまざまな製品に直接触れられる貴重な機会でした。

企業展示コーナーでは、コミュニケーション機具、最新の車いす機器、食事介助機械など様々な展示がありました。



今回の大会では、執行部会長と東京大会実行委員のメンバーが準備にあたり尽力しました。

最後に実行委員と会長のコメントを紹介いたします。

人とのつながりが力を生み出す

東京大会実行委員：小藺 妃路子

今大会は、複数の学校から委員が集まり、実行委員会が構成されました。

小平からは駒井会長と私が参加し、メンバーの多くは、私が会長を務めていた令和元年度～3年度に共に活動した仲間たちでした。久しぶりに気心の知れた友人たちと再び活動できることを嬉しく感じながら、1年前から話し合いを重ね、準備を進めてきました。

都肢P連では15校が役割を分担し、小平特支は墨東特支とともに「大会記念品」を担当しました。小平からは私のほかに、昨年度の副会長3名が委員として参加し、墨東の5名とともに和やかな雰囲気の中でアイデアを出し合いました。

15校の子供たちの作品を印刷したバンダナをはじめ、大会ロゴ入りのうちわやコットン袋などを準備し、前日には笑顔と会話の絶えない中、400名分の袋詰めを行いました。

学校は違っていても、部活動の大会や病院で顔を合わせた際には自然と声を掛け合うような、温かいつながりが生まれました。

前回の東京大会(平成29年度)は1泊2日で紙冊子の要項が配布されましたが、今大会は1日開催となり、HPでの情報発信へと形を変えました。

それでも、保護者や先生方が一堂に会し、子供たちについて語り合い、悩みを共有し、「自分だけではない」と感じられる時間の大切さは変わりません。

PTAの大会ならではのつながりに触れ、人との関係がどれほど大きな力を生み出すのかを改めて実感する機会となりました。



大会運営を通じて

会長：駒井 夏美

本大会では、本校PTAの副主幹校として大会運営に携わるとともに、関肢P連副会長として大会全体に関わる機会をいただきました。

今大会は、数年ぶりの対面開催となりました。

オンラインで多くのことが完結する時代となり、限られた時間の中で効率や生産性が求められることは、ある意味では自然な流れなのだと思います。

その一方で、人と人が直接顔を合わせ、言葉を交わしながら考えを深める時間の大切さを、改めて感じました。

議論には時間も労力も必要ですが、それは決して無駄な時間ではありません。人と話す中で、自分では思いもらなかった考え方や価値観に出会い、自分自身の視野や感性が磨かれていきます。

そして、その積み重ねが、より良い判断や合意形成につながるのではないかと思います。

今回、各地から集まった多くの方々と直接顔を合わせ、言葉を交わし、協力して大会をつくり上げる中で、改めて「つながり」の大切さを実感しました。

異なる立場や経験を持つ方々との出会いや対話から得られる気づきや学びは、これからのPTA活動や子どもたちの未来を考える上で、欠かせないものだと感じています。



大会を終えて



次回は新潟!

来年度開催校は
新潟県立東新潟特別支援学校。

閉会式では大会宣言文が
読み上げられ、
バトンが渡されました。



閉会式に登壇する当校会長

大会後には宣言文が東京都教育庁
に提出されます。

教育福祉政策への働きかけを行い、
子どもたちのよりよい環境づくりの
ため、一同力を合わせています。



光明学園キャラクター
こうちゃんめいちゃん。

ここまで読んでくださり、
ありがとうございました♪